

博士論文（要約）

現代教育学における理念の再構築

——ベルナール・スティグレールの技術哲学に着目して——

李 舜志

本論は、現代教育学における理念の再構築のために、フランスの哲学者ベルナール・スティグレル(Bernard Stiegler 1952~)の技術哲学を取り上げる。

近年の理念に関する先行研究は、望ましい理念やその導き方ではなく、理念それ自体への批判を趣旨とするものであった。このような理念への根本的な批判は、教育学のみならず第2次世界大戦後の社会学や政治哲学においても散見されるものであり、それらはファシズムや共産主義の脅威といった当時の世界情勢と結びつくことによって、切迫感の漂うリアリティのあるものとして受け止められたのであった。

しかし2000年代以降、理念の喪失によって現代社会は現状を追認するだけのシニシズムに陥っているのではないか、という問題提起がなされ始めている。理念を掲げる政治や教育は、確かに他者を排除する危うさを秘めてはいるだろう。しかし同時に、理念を掲げることのない政治や教育もまた、看過することのできない問題を孕んでいる。理念が影響力を喪失したこと、それは全体主義からの解放だけでなく、新たな危機を、そして教育に新たな課題をもたらしているのだ。

以上から、本論は教育における理念の意義を、啓蒙や進歩の理念がもはやリアリティを持ちえない現代において再検討することを目的とする。現代教育学における理念の再構築にあたっては、上記の理念批判によって提起された諸問題と同時に、理念の喪失によって教育にもたらされた課題と論点をも射程に収めるものでなければならない。他方、本論は理念を掲げる教育が動員に墮することのないように、理念に対する批判的契機を教育において確保することもまた目的とする。エロスに例えられるほどの激しい欲望を惹起する理念、それが教育にとって根本的な意義を持つと同時に危うさもまた孕むことを、幾度もの戦争や圧政を潜り抜けてきた現代の教育学は決して看過してはならないだろう。

そして本論は、これらの論点を検討するためにスティグレルの技術哲学を参照するものである。これまで教育学においてスティグレルの論考は最新の技術についての検討のために取り上げられてきた。しかし『技術と時間2』の副題が「方向喪失」であることからわかるように、スティグレルは進むべき道を失った現代社会、さらには生徒たちに示すはずの道を失った教育を問題視している。そしてこの状況を考察するために取り上げられるのが理念なのである。スティグレルは最新の技術状況を哲学的に考察するのみならず、理念の構成プロセスやそれが意識に与える影響なども分析する。それによってシニシズムの克服と同時に、ただの動員に墮することのない政治および教育が議論の俎上に載せられるのである。その問いの提起、思考の道筋、そして限界の提示こそが、スティグレルの思想を教育学において取り上げる意義だと言えるだろう。以上のように、本論はスティグレルの技術哲学を参照することによって、理念への動員に墮するのでもなく、また理念の喪失に甘んじるのでもない教育を構想することを目的とするものである。

第1章では、技術の哲学者であるスティグレルが理念の問いを提起し、そこから教育の危機を導出するに至る道筋を辿る。その際「科学技術」という、科学と技術が結びついた

言葉の奇妙さに着目する。アリストテレスに端を発し、カントにまで受け継がれた西洋における伝統的技術観は、科学技術という概念及び制度の普及した現代においてもはや維持されえない。スティグレールが技術と同時に理念を考察の主題とするのは、この科学技術に対する危機意識によるのである。しかしこの危機意識は生命倫理的問題圏に限定されるのではなく、人間の生における起源的技術性と、人々に進むべき方向を示す教育にまで及ぶ。西洋における伝統的な技術観の批判が理念の問いを、そして教育の問いを提起せしめるのである。

第2章では『技術と時間1』を主に取り上げつつ、人間の生における起源的技術性を、神話、人類学、存在論の3つの視座から検討する。まずはギリシャ神話におけるエピメテウスの過失を取り上げることによって、スティグレール哲学の根本モチーフである「技術と時間」について確認する。そしてこの神話から得られた着想を、先史人類学者であるアンドレ・ルロワ＝グーランの「ヒト」の誕生をめぐる議論に重ね合わせる。さらに以上の技術と時間についての分析を、ハイデガー『存在と時間』における現存在分析と照らし合わせる。エピメテウスの過失（神話）と、「ヒト」の誕生をめぐる先史人類学的考察（人類学）と、現存在をめぐる考察（存在論）とをそれぞれ重ね合わせることで、スティグレールは「人間の生における起源的技術性」を様々な角度から考察し、主著の表題にもなっている『技術と時間』というモチーフを掘り下げるのである。

第3章では『技術と時間2』を主に取り上げつつ、以上の起源的技術性の議論をより精緻に分析するために、技術による意識の根源的な代補について検討する。スティグレールはプラトンの「メノンのアポリア」を継承するものとしてフッサールの『論理学研究』や『内的時間意識の現象学』を参照しつつ、そこに技術による根源的な代補が看過されていると指摘する。フッサールの議論を批判的に読解することによって、スティグレールは意識のより詳細な構造に分け入り、そこから現代における「注意」の問題へと議論を展開する。注意における代補という観点から、後に見るように『青少年と世代を気遣うこと』においてスティグレールは自らの技術哲学的考察を教育へと結びつける。

第4章では『技術と時間3』を主に取り上げつつ、スティグレールによるカント『純粹理性批判』の技術論的読解を検討し、それによって技術と理念の問題を本格的に取り上げることにはしたい。カント読解に続く章で教育が主題となっていることからわかるように、『純粹理性批判』の技術論的読解は単なるカント批判にとどまらない。そこでは人が理念に駆り立てられることの存在論的かつ政治的意義が俎上に挙げられるのであり、その際に「教育はどのような役割を果たすのか」という問いも同時に展開される。そして理念を教育に導入しつつ、それが動員に墮することなく批判的契機に開かれているためには、代補の「論理」だけでなく代補の「歴史」の分析もまた必要であることが明らかとなる。

第5章では、代補の論理と歴史の双方を検討するために、フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』および『幾何学の起源』を技術論の観点から検討する。フッサールはヨーロッパの危機に際して、観念化を介した理性の自己展開という目的論的歴史観を

描き出す。この歴史観においてスティグレルが着目するのは、きわめて形而上学的なフッサールの議論の中に「技術」が含み込まれている点である。ここからスティグレルは幾何学的対象、ひいてはヨーロッパというプロジェクトが、アルファベットという歴史上の発明品によって代補されていることを指摘する。幾何学的対象のような非歴史的な観念が、アルファベットという発明品によって代補されていることを確認することによって、これまで検討してきた代補の「論理」が代補の「歴史」と交差するものであることを明らかにする。

最後に第 6 章では、以上の代補の論理と歴史の交差においてスティグレルの教育論を検討するために、カントの『啓蒙とは何か』を参照する。先述したように、進歩をメルクマールとする啓蒙思想は現代において、経済成長という面においても、他者への倫理という面においてもリアリティを失ったと言われている。しかし第 6 章で見ると、カントの『啓蒙とは何か』は現代においても積極的に参照される論考であり、スティグレルもまた教育論を展開するにあたってこの論考を取り上げている。ただしスティグレルは『啓蒙とは何か』を代補の論理と歴史の観点から考察するのであり、その点においてカントの議論はなおも批判されなければならない。以上のように現代においてもいまだ意義の薄れることのない『啓蒙とは何か』を技術論的にアップデートすることによって、理念を掲げながらも、動員に墮することなく批判的省察を可能にする教育の構想を試みる。